

論文要旨

1. ホー、ティー フォン ユン（ベトナム）

「恥の文化から見る孤独死」

キーワード：孤独死、社会的孤立、無縁社会、『菊と刀』、恥の文化

要旨：

孤独死のケースは日本では多発しているが、ベトナムではまだ少ない。そこで、孤独死を引き起こす原因に関心を持った。『菊と刀』で述べられた「恥の文化」は、日本の文化の特徴を示すキーワードとしてよく使われている。そこから、恥の文化と孤独死の現状との関係があるだろうかと考えるようになった。本論文では、孤独死が起こる原因は何なのかということについて、日本人の「恥の文化」という視点から考えていきたい。

第1章では、『菊と刀』の「恥の文化」を分析した。第2章では、日本の社会的孤立の背景を分析した。また、恥の文化と社会的孤立と孤独死の関係性を調べるために、インタビュー調査を行った。第3章では、孤独死のケースがまだ少ないベトナムとそのケースが多発している日本を比較し、相違点・共通点を見た。

恥と社会的孤立についてのインタビュー調査の結果、両者は関係があるとわかった。他人に迷惑をかけたくない結果として、高齢者が社会支援を拒否し、地域とのつながりが失われてしまうため、「恥の文化」と「孤独死」には関係があると結論づける。

2. チラパットポキン、タンヤーポーン（タイ）

「方言によるステレオタイプ —岐阜を舞台にした作品から岐阜弁について考える—」

キーワード：岐阜弁、ステレオタイプ、方言コスプレ、岐阜を舞台にした作品、文末表現

要旨：

過去の日本社会では方言は否定的にとらえられていたが、マスメディアで取り上げられるようになったことで、現在は羨望されるものになっている。現代のステレオタイプの強い関西弁や博多弁もそのマスメディアからつくられた。一方で、マスメディアでほぼ扱われず、ステレオタイプが弱く印象の薄い方言も少なくない。岐阜弁もその中の一つである。そのステレオタイプの強さの差に疑問が湧いた。本論文では、方言を用いた映画やドラマで欠かせない「文末表現」に注目し、岐阜を舞台にした作品から岐阜弁の文末表現を抜き出した。その「文末表現」を基にし、岐阜弁の印象が薄い原因や、今後の岐阜弁のステレオタイプの方向について、岐阜弁話者ではない者にインタビュー調査を行った。その結果、岐阜県の立地の微妙さなど様々な原因が指摘され、今後のステレオタイプがつけられることも困難であるとの意見を得た。

第一章では、日本の方言とステレオタイプの変遷について述べる。第二章では、岐阜を舞台にした作品で使用された岐阜弁の文末とインタビュー調査の結果を述べる。

3. ブンマーク, サシウィモン (タイ)

「現代スポーツ小説に描かれた「風」 —『風が強く吹いている』と『一瞬の風になれ』を例として—

キーワード：文学の中の風、現代スポーツ小説、陸上競技、『風が強く吹いている』、『一瞬の風になれ』

要旨：

私は日本語の授業で、「風」が描かれている作品を読み、「風が吹く」とはただ物理的な意味での風ではなく、「生きる」という意味を持っていることや、「風」がスポーツに大きな影響を与えることを知ったため、文学作品における「風」とスポーツにおける「風」について興味を持つようになった。

調べたところ、「風」は昔から文学作品に用いられ、時代によってさまざまな意味を表していることが分かった。これらを踏まえ、現代のスポーツ小説にはどのような「風」の描写が登場するか、時代の流れを汲みながら調べた。

本論文では2006年に書かれた三浦しをんの『風が強く吹いている』と佐藤多佳子の『一瞬の風になれ』というスポーツ小説を例として、スポーツにおける「風」の影響と、「風」の描かれ方とその効果について考察した。その結果、現代スポーツに描かれた「風」は青春、生きることなどの意味を表しており、古典文学とは違う意味を表していることが明らかになった。また、「風」は登場人物の心を表現できることも指摘した。